

「今後 10 年の町田市民文学館のあり方について」

答申

第 3 期町田市民文学館運営協議会

目 次

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	2
1. 文学の魅力をどのように伝えるのか・・・・・・・・	5
2. 文学館の各事業の情報・魅力をどのように発信するのか・・・・・・・・	11
3. 街づくりと文学館・・・・・・・・・・・・・・・・	13
4. 町田市民文学館の運営手法について・・・・・・・・	16
5. 市民の活動・交流の場としての文学館・・・・・・・・	18
6. 文学館は次世代に何ができるのか・・・・・・・・	21
7. 町田ゆかりの作家と資料保存センターとしての文学館・・・・・・・・	26
おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	28
 町田市民文学館 10 年後の未来予想図	31
資料編	
(1) 諮問文・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	37
(2) 委員名簿・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	38
(3) 審議経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	39

はじめに

——町田市民文学館ことばらんの今——

町田市民文学館ことばらんどは、2006 年 10 月に開館し、2016 年度 10 周年を迎えた。町田駅に近い中心市街地に位置し、「ことば」や「文学」の魅力に気軽に触れることができる文学館として来館者に親しまれている。主な事業は、年間 4 回の展覧会、講演会やワークショップなどの教育普及事業、地域ゆかりの文学者の資料の収集・保存・公開・研究、市民研究員制度の実施である。子どもからシニアまで幅広い年代の市民が自ら進んで学ぶ生涯学習のための社会教育施設として、重要な役割を果たしている。開館当初は約 4 万人だった年間の来館者数は、現在 6 万人を超えている。

しかし、来館者数・観覧者数ともに長期的には増加傾向にあることは確かだが、毎年必ず数値目標に到達できているとは限らない。ことに近年は頭打ちの傾向が見られる。また、文学館の存在が町田市民に広く浸透しているとは言いがたく、メディアへの発信のあり方が問われている。それと並行して、「量」的な評価とは別に「質」的な評価の指標が求められてもいる。展示・教育普及事業が優先されて、それら以外の事業の実施が後まわしになる、経費の上で効率の良い運営が求められる、といった課題もある。2015 年実施の町田市市民参別型事業評価では「要改善」という評価が出された。

——町田市民文学館運営協議会の使命——

いま、町田市民文学館は、当初の設置目的を果たしつつも、将来に向けた、新たな運営計画を策定しなければならない時期にあると言える。そこで、町田市教育委員会から「今後 10 年の町田市民文学館のあり方について」というテーマでの諮問があり、第 3 期町田市民文学館運営協議会が組織された。同協議会は文学館において 2015 年 7 月から 2017 年 1 月までに 9 回の会議を開催し、この 10 年間に実施した事業の検証、今後 10 年間の文学館のあり方の検討、改善方法や新たな

事業の提案などを行ってきた。つきつめて言えば、その使命は「次世代の文学館はどうあるべきか」という問いに答えることにあった。

第3期町田市民文学館運営協議会は、ここに、これまでの審議内容をとりまとめ、教育委員会に答申として提出する。この答申により、10年後の町田市民文学館が、町田市内のみならず全国に誇ることのできる文化施設として、いっそう成長・充実していることを願うものである。



(参考)町田市民文学館の現状

1. 町田市民文学館「目指すべき文学館像」(「市民が集う文学館の創造」より)

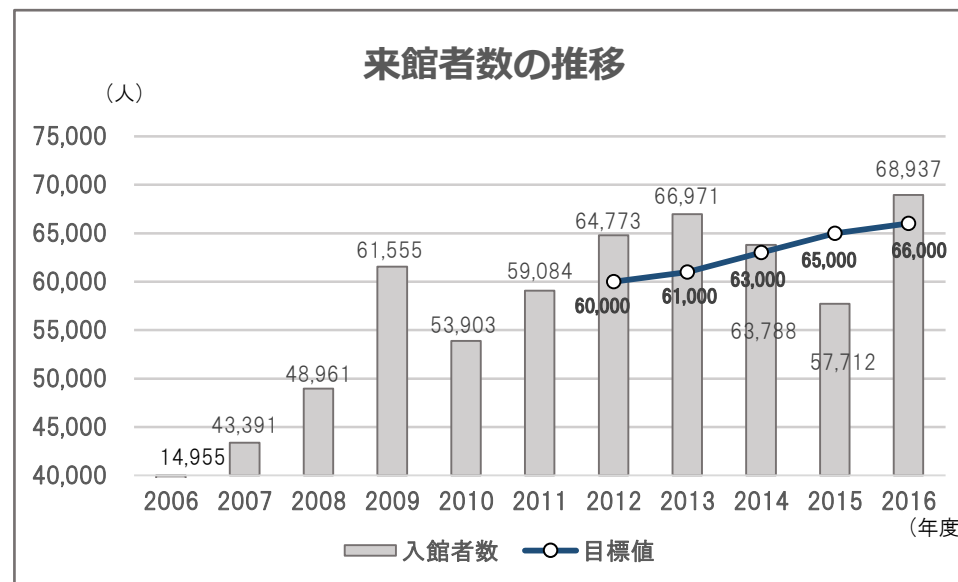
- ① 「町田の文学」に関する総合的な資料保存センター
- ② 「文学は面白い」というメッセージの発信源
- ③ 市民の文学活動・交流・楽しみの拠点
- ④ 市民主体の学習・研究活動の場
- ⑤ 町田の都市イメージを高める文化装置

2. 来館者数

初めて年間を通して開館した 2007 年度は来館者が約 4 万人だったが、次第に増加し現在は 6 万人前後で推移している。

3. 文学館の認知度

2016 年 3 月に実施された 2015 年度町田市市政モニター第 3 回アンケート集計結果(回答者：市内在住 20 歳以上、171 名)では、「文学館を利用したことがない」と回答した市民が 80.7%、その内の 56.5%が利用したことがない理由として「何をやっている施設なのか分からないから」と回答している。



※来館者数の推移のグラフにおける 2016 年度来館者数は 2 月 28 日現在の見込み数である。

1. 文学の魅力をどのように伝えるのか

「文学の魅力をどのように伝えるのか」は町田市民文学館にとって、最も大きな課題である。市民にいか「ことば」や「文学」の魅力を伝えていくのかについて、基幹事業である展示事業、教育普及事業から検証・検討した。

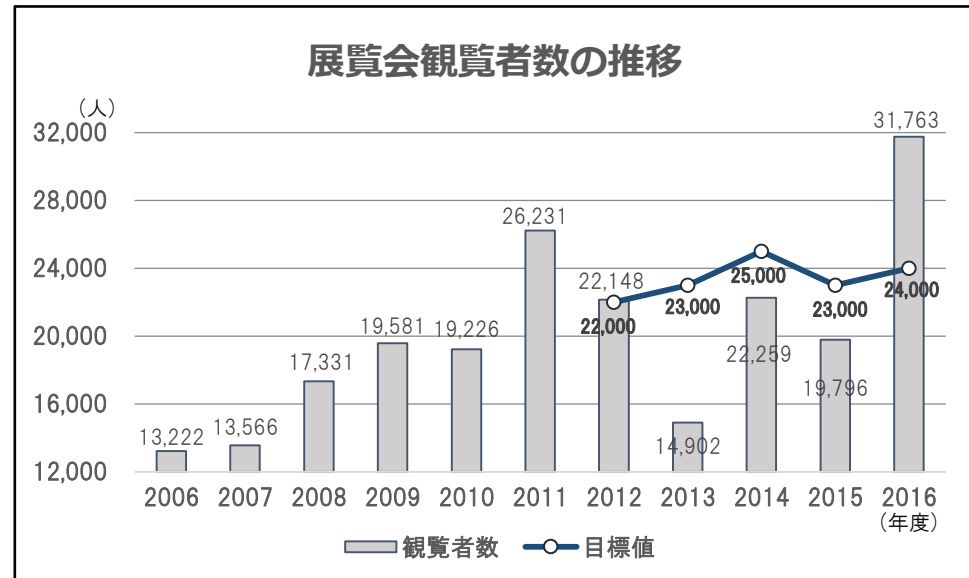
(1) 展示

(a)現状

観覧者数の推移を見ると 2006 年の開館から 2010 年度までは増加しているが、2012 年度以降は年間 2 万人前後となっている。2007 年度からは、「受益者負担の適正化に関する基本方針」の考え方にに基づき、年間 1 回有料展を実施し、設置目的の達成と受益者負担の適正化のバランスを考慮しながら事業を行っている。

(b)運営協議会の意見

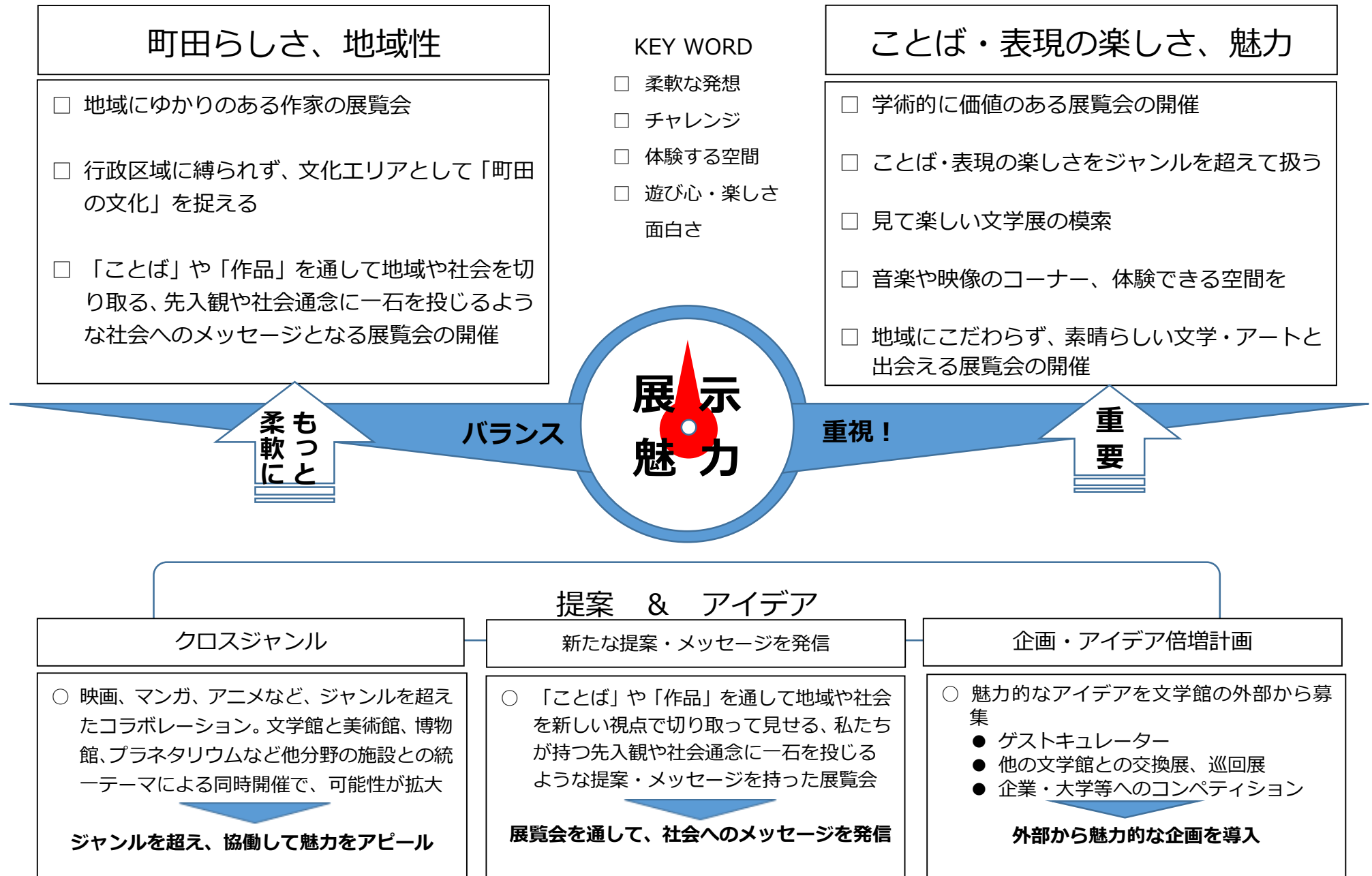
町田市民文学館は、市が運営する文学館であり、ゆかりの作家を取り上げることは大切だが、テーマや内容にもう少し柔軟性やメッセージ性があると良い。学術的に価値の高い展覧会はもちろんだが、エンターテインメント的要素、見て楽しい展覧会の可能性を模索して欲しい。また、普段何気なく感じているがあまり意識されていないことを、展示を通して発信したり、観覧者に「気付き」や「発見」を促すことで、社会へのメッセージとなるような展示も文学館のオリジナル性を高め、結果として存在価値を高めることにつながる。時にはゲストキュレーター¹など外部の人の意見を積極的に取り入れると展示の可能性が広がり面白いものができる。



1：正規の学芸員のほかに、特定の企画・調査のため一定期間人材を招聘する客員学芸員。

※展覧会観覧者数の推移のグラフにおける 2016 年度展覧会観覧者数は 2 月 28 日現在の見込み数である。

□ 文学の魅力をどのように伝えるのか(展示)



□ 運営協議会の意見を取り入れて実施した展覧会

2016.4.16－6.26 実施

「この街の現在
－ゼロ年代の町田若手作家たち－」展

- ゲストキュレーターの導入
塚越健司(社会学者)
- 地域にゆかりのある若手作家
を取り上げる
- 漫画家を対象に加える
浅野いにお(漫画家)
- 若手作家の作品を通して町田
の街の現在・未来を考える
- 提案・メッセージ性を持った展
覧会



感想

- 展覧会の新たな可能性を感じさせる試みだった
- 町田の文化的特徴を位置付ける上で、新しかった

☆観覧者数
5,156 人
(「春展」前年
度比 114%)

2016.7.16－9.19 実施

「妖怪がいた！
－ここにも、そこにも、町田にも－」展

- 絵巻・浮世絵などジャンルを超えて、見て楽しめる作品を展示
- 子どもたちが好きな「妖怪」を主題にしたテーマ展
- 体験空間を設置「百物語の部屋」
- 江戸博・兵庫県博など、他館でも「妖怪展」が開催されたことによる、相乗効果



感想

- 絵本原画に加え、絵巻、浮世絵など、バリエーション豊かな資料で見応えがあった
- 「妖怪」は子どもたちが大好きな題材で、タイトルもインパクトがあった

☆観覧者数
16,604 人
(開館以来、過去最高)

(2) 教育普及事業

(a)現状

2008 年から年間 120 回程の事業を実施、参加者は増加している。開館当初から、ライフステージに応じた事業展開を目指しており、文学の魅力を伝える事業、「ことば」や「文字」に関わる事業、市民協働による事業の 3 つを軸に事業を展開している。しかし、参加者はシニア層が多く、世代の偏りが課題となっている。

(b)運営協議会の意見

参加者は増加しているが、幅広い世代の方に参加してもらうため、「ことば」や「文学」といったジャンルに固執することなく、「文学」の周辺領域も含め、文化芸術の楽しさに触れる事ができる事業展開が望まれる。漫画や映画、音楽や演芸等、これまで取り上げてこなかったジャンルを積極的に試みることによって、新たな参加者が期待できる。若い世代は自らが表現できる場を求めている。発想を変え、ニーズを取り入れ、主催者と参加者が互いに影響を与えながら新たな価値を生み出す仕組みが必要である。また、作文コンテストや創作講座など、表現の可能性を引き出したり、文学を通して新しい社会のあり方を提起するなど、提案・メッセージ性の高い事業も必要である。こうした事業の積み重ねが、文学館の独自性や存在意義に繋がっていく。一方で動画配信サイトや SNS²など ICT 技術³の普及により、講座の様子や展覧会のメイキング映像、朗読による作品発表等が手軽にできるようになった。こうした技術を積極的に活用してほしい。企業や大学にコンペティション⁴をして、新たなアイデアを模索したり、外部の人にゲストプランナーとして参加してもらい企画を実現するのも良い。魅力的な企画を文学館の外から募集する仕組みが必要である。



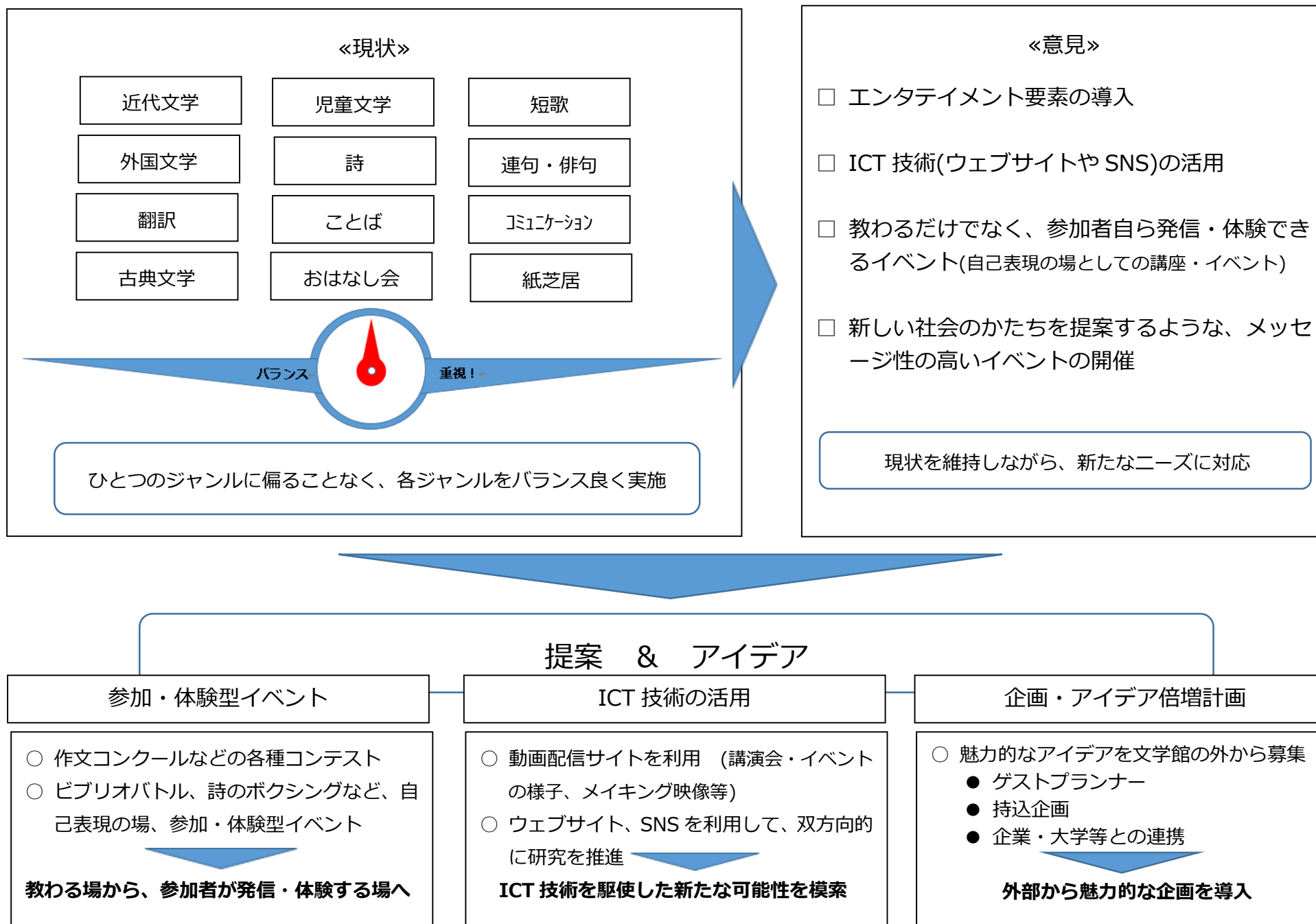
2：個人間のコミュニケーションを促進し、社会的なネットワークの構築を支援する、インターネットを利用したサービス。twitter、Facebook、instagram などが代表例。

3：情報処理・情報通信分野の関連技術の総称。「information and communication technology」の略。

4：複数人数の製品・作品・アイデア等の評価を競い合わせ、優れたものを選ぶこと。

※教育普及事業参加者数の推移のグラフにおける 2016 年度教育普及事業参加者数は 2 月 28 日現在の見込み数である。

□ 文学の魅力をどのように伝えるのか(教育普及事業)



□ 運営協議会の意見を取り入れて実施した事業

2016.8.21 実施

夏休み Tシャツ作り体験
「ことばとアート Tシャツ」



- 市内在住の造形作家の萱沼明美氏、デザイナーの村上太郎氏の持込企画
- 夏休みの自由課題に対応したイベント
- 手芸・工作から「ことば」への興味を喚起

感想

- 自分で考えてきた「ことば」や「デザイン」がTシャツになって楽しかった

☆参加者数
16人

2016.8.2－10.30 実施

「森村誠一の写真俳句コンテスト」



- コンテスト形式で作品を募集
- 自己表現の場、作品発表の場を作り出す
- 小学生からシニアまで幅広い年代の人が参加
- 写真と俳句という、二つのジャンルをクロスして新たな魅力を生み出す

※2016年12月1日から2017年1月31日まで2階大会議室前の掲示板を使用して入選作品展を開催

☆応募数
280句

2. 文学館の各事業の情報・魅力をどのように発信するのか

町田市民文学館は年間4回の展覧会をはじめ、教育普及事業など、多くの事業を実施している。こうした各事業の情報や内容、その魅力をどのように発信するのか、また、文学館の存在を市民に浸透させていくためには、情報発信の側面からは何が必要なのかについて検証・検討した。

(1) 広報

(a)現状

2006年の開館時、文学館に広報担当は存在せず、展覧会や各事業の担当者が市報の記事を執筆したり、ポスター・チラシを発送していた。しかし、2010年頃から情報発信の必要性を感じ、2011年4月に広報担当を設置。現在では、町田市ホームページ(以下「HP」という。)内の町田市民文学館のサイトの管理や展覧会のポスター・チラシ、プレスリリースの送付、マスコミや展覧会・イベント情報サイトへの情報提供、他館展覧会情報の掲示、有料広告の出稿等を継続的に実施している。

(b)運営協議会の意見

情報を欲している人に、いかにして文学館の情報を伝えるのかを考えることが広報の基本である。マスコミへの情報提供は担当者へ直接伝える必要があり、一方で不特定多数に伝える場合は、ポスターやチラシなどに加えHP、SNS等の利用は欠かすことができない。市立図書館のトップページにバナーを設置したり、イベントごとに発信力のある人物を見つけPR活動を担ってもらいと新たな顧客を開拓できる。講演会や座談会終了後にその内容をまとめたり、イベントの様子を写真とともにレポートしたり、展覧会のトピックなどを集めてニュースレターやフリーペーパーとして配布するのも良い。町田の文学館でしか発信することができないオリジナルの情報にこそ価値がある。現在、文学館には単独のHPがなくSNSの利用も制限されている⁵。効果的な情報発信のためには、広報を民間に委託するのもひとつの方法である。

5：町田市では2017年3月1日から、各課、各施設ごとのtwitter、Facebookの使用が可能となった。

□ 文学館の各事業の情報・魅力をどのように発信するのか

「課題点」

- 効果的な情報発信手法の確立
- 年代別、ターゲット別の情報発信手法の確立
- 個人情報保護、ウェブサイト利用規制への対応
- ウェブサイト(HP)を利用した情報発信
- SNS を利用した情報発信手法の可能性

「意見」

- 文学館オリジナルの情報にこそ価値がある
- 継続的な情報発信ができる体制の確立
- 従来の紙媒体の良さを生かした、アナログ的手法による情報発信の可能性
- ICT 時代やターゲット層に対応した発信手法の確立

伝えたい人に、速く、分かりやすく、魅力を発信！

提案 & アイデア

マーケティングに基づく継続的な情報発信

- マスコミ：継続的な担当記者の情報収集
- リリース：各媒体に合ったリリース作成
- ターゲット：年代に合わせた発信方法、年代に合わせ発信力のある人を選定し、協力を得る

ターゲットを明確にした継続的な情報発信

ICT 時代への迅速な対応 「積極導入」

- HP・Blog：アーカイブスの蓄積
- SNS：情報発信に特化、双方向的コミュニケーションツール

それぞれの特徴を生かした情報発信の必要性

指定管理者制度の導入、PR 会社への委託

- 制限も無く、多様なノウハウを蓄積する民間事業者の導入。最新技術へもスピーディーに対応
- 展覧会・文化事業を主な事業とする、PR 会社への民間委託、指定管理者制度の導入

民間活力の導入

3. 街づくりと文学館

町田市民文学館は、「(仮称) 町田市中心市街地まちづくり計画(素案)」において、国際版画美術館、(仮称)国際工芸美術館、中央図書館などとともに、町田発のアート・カルチャーを楽しめる施設として位置づけられており、施設に面した「文学館通り」を中心に、地域との連携を進め、街の賑わいを創出するよう努めている。ここでは、街づくりの中で文学館が果たす役割について検証・検討した。

(1) 地域社会や周辺施設との連携

(a)現状

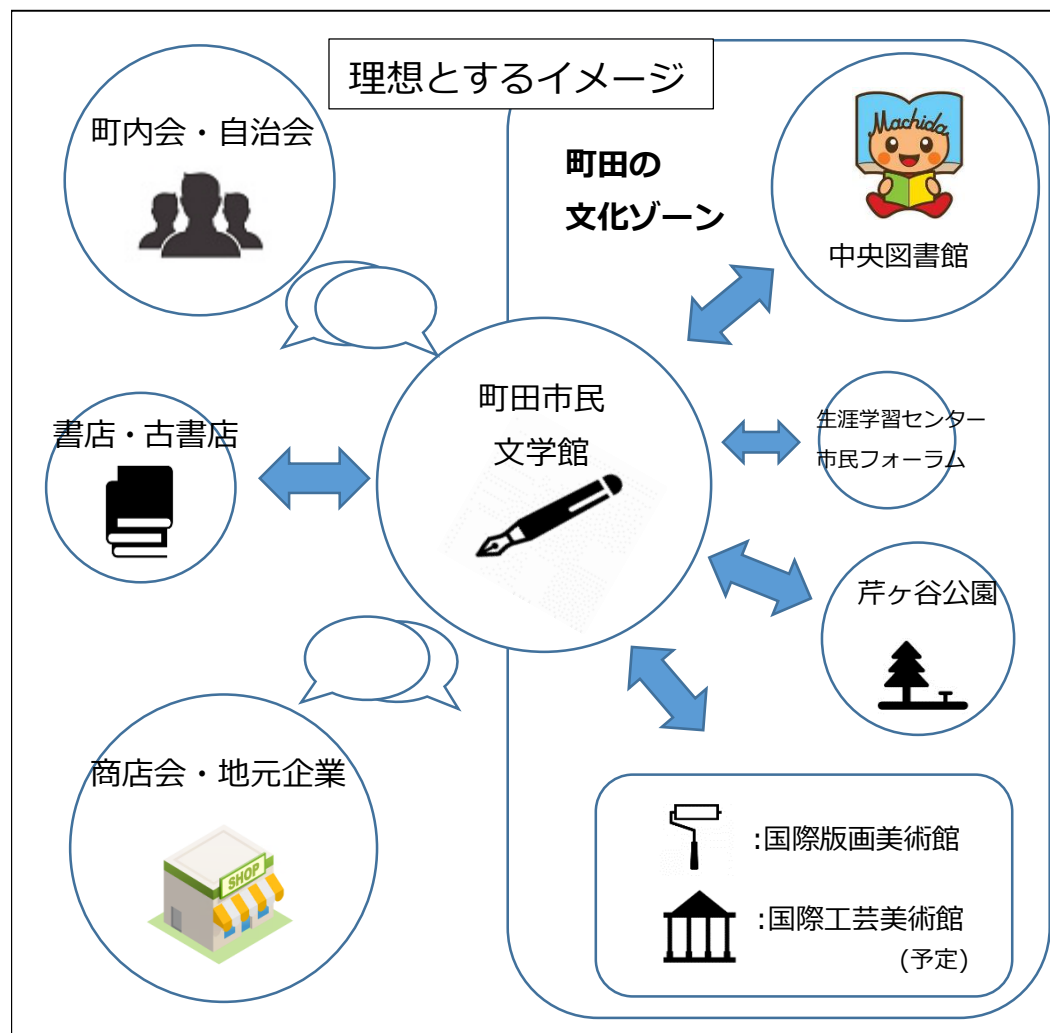
2007年10月の開館1周年から、原町田四丁目第二町会、文学館通り商店会、原町田四丁目第二地区街づくりの会との共催で、毎年「文学館まつり」を開催。2016年には第10回を迎えた。また、展覧会の際に、ホテル・ザ・エルシー(現・ベストウェスタンレンブラントホテル東京町田)や小田急百貨店町田店、新星舎印刷所や音楽座ミュージカル等と連携し事業を実施してきた。

(b)運営協議会の意見

文学館の存在意義やオリジナリティを大切にしながら、それを生かした上で、文学館のファンや地域住民たちと一緒に試行錯誤して行く必要がある。現代の町田の街の文化的特徴はサブカルチャーに、より色濃く反映されている。サブカルチャーを核として賑わいを創出するなど、街の個性を生かした手法を取り入れたい。住民サービスや近隣商店会への寄与なども重要な視点ではあるが、それを優先してオリジナリティを失い、埋没してしまっはいけない。施設連携を考える際に、交通の便は重要である。施設循環バスが良いだろう。「ことば」や「文学」といった枠を超え、街の文化スポットとして賑わいの中心になることに施設としての価値がある。既存のイベントとの連携も考えられる。

「町田時代祭り」「町田さくらまつり」などとの連携を検討すべきである。

□ 街づくりと文学館



提
案

ア
イ
デ
ア

□ 運営理念に基づいた独自の魅力の確立

住民サービス、地域貢献の前に、町田の文学館オリジナルの魅力を確立・発信し、周囲を巻き込んでいくことが必要

□ コレクションを核とした魅力の創出

街の文化的特徴、コレクションを核とした魅力の創出。町田が蓄積するサブカルチャー的魅力を街の個性として生かす

□ 施設をつなぐ交通手段・催しの必要性

町田の文化施設はいずれも駅からのアクセスが良くない。高齢者も多く、近隣といえども、各々をつなぐ交通手段が必要ではないか

□ 四季折々に開催されている既存の催しの拡大・充実

町田駅および文学館周辺では、四季を通じて様々な催しが既に実施されている。こうした既存の催しのいくつかを柱にして、町内会・商店会・地元企業にも参加してもらい、規模を拡大し連携していく工夫が必要

- 運営協議会の意見を取り入れて実施した催し

2016.10.23 実施

「第 10 回文学館まつり」を開催

- 原町田四丁目第二町会・文学館通り商店会・原町田四丁目第二地区街づくりの会との共催を「文学館まつり実行委員会」方式に変更
- 「文学館通り」の一部を歩行者天国にした
- 「生涯学習センターまつり」「町田時代祭り」と連携
- 前日祭の開催
- 商店会(周辺店舗)の積極参加



感想

- 子どもから大人まで楽しめるように工夫されていて素晴らしい
- 毎年楽しみにしています。いつか、子どもが大きくなったら、フリマに出品してみたい
- 武者行列も加わりにぎやかでした。皆が楽しそうにしているのがよかった
- 表の通りが通行止め(歩行者天国)になり、安全で歩きやすくなった
- 例年以上の盛り上がりでした。年々大きなおまつりになって嬉しい

☆参加者数

- ・前日祭：416 人
- ・当日：3,000 人
- 合計：3,416 人

※前年度比 292%

4. 町田市民文学館の運営手法について

町田市民文学館は、開館以来 10 年間、町田市が直接運営を担う“直営”で運営してきた。しかし、2015 年 5 月に実施された「2015 年度町田市市民参加型事業評価」では、「要改善」と評価され、「事業目的を達しつつ、効率的な運営を行うために、事業の担い手として望ましい主体について検討する必要がある」と指摘された。ここでは、町田市民文学館の設置目的を果たす上で、効率的・効果的な運営手法について検証・検討した。

(1) 町田市民文学館の運営手法について

(a)現状

町田市民文学館は、町田市が直接運営を担う“直営”で運営されているが、施設貸出業務を「公益社団法人町田市シルバー人材センター」に委託し、1 階カフェコーナーを「特定非営利活動法人アミティけやき」が賃貸借契約により運営している。

(b)運営協議会の意見

運営手法を検討するに当たって、直営、指定管理者制度、直営と指定管理者制度を併用する、3 つのタイプが検討された。町田市では、現在スポーツ施設の多くが指定管理者制度を導入しているが、スポーツ施設はハード面が重要視されるのに対し、文学館は学芸員が担うソフト面が重要視され、指定管理者制度に向いているとは思えない。現在の文学館の雰囲気は直営ならではのものである。地域に根差した運営から生まれる細やかな気配りこそ直営の良さである。結果として、どの運営手法を選択するにしても、企画内容や運営にどれだけ自由度が担保されるのかが重要である。一方、広報部門や喫茶部門はサービスを向上させる余地がまだまだ残されており、指定管理者制度を導入するなど民間との連携を図ることでそれらを補強することも有効な手段である。

□ 町田市民文学館の運営手法について

「考えられる運営手法」

- 市による直接運営(直営)
- 財団法人や民間事業者等による指定管理者
(指定管理者制度)
- 総務部門、展示部門、教育普及部門、資料整理部門、
司書部門、広報部門等、部門別にそれぞれの強みをい
かすかたちで、直営と指定管理者制度の併用

「意見」

**理念に基づく運営を担保した上で、それぞれの
強みをいかした運営手法を検討**

提案 & アイデア

- 既に指定管理者を導入しているスポーツ施設等は、ハード
の管理の側面が強い
- ソフトが重要であり、学芸員がそれを担う文学館には、施
設の性質上、適さないのではないか

ソフト部門は直営が望ましい

- 発信力の脆弱な広報部門、近年、文化施設の魅力のひとつと
なっているサロン・喫茶部門など、民間が得意とする部門を
委託または指定管理者とし、サービスを向上することも必要
- 専門性や継続性を必要とする展示や教育普及事業等は、直営
にすることで強みを発揮できる

民間と直営の併用を検討すべき

5. 市民の活動・交流の場としての文学館

町田市民文学館は、市民の活動・交流の場、文学を軸とした楽しみの拠点を目指し、文学サロンや閲覧室の運営を行ってきた。また、こうした市民活動の受皿として、会議室の貸出しのほか、市民研究員制度の実施、各種事業へのボランティアの導入などを積極的に実施している。こうした中で、文学館が市民の活動・交流の場として更に発展するためには何が必要なのかについて、検証・検討をした。

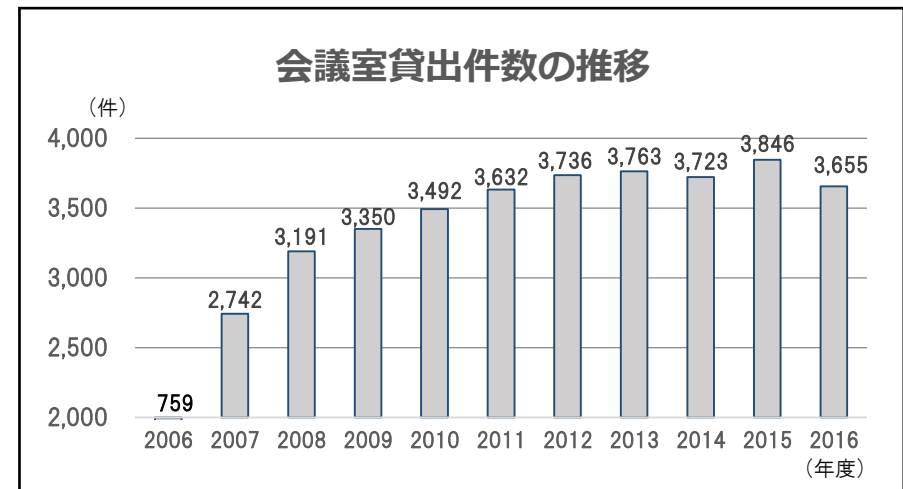
(1) 市民の活動・交流の場としての文学館

(a)現状

会議室の年間貸出件数は、開館以来増加しており、2015年に実施した会議室利用者アンケートでは満足度も高い。その他、文学館で実施した教育普及事業等から、新たなサークルが立ち上がったり、市民が文学館の所蔵する資料を使って自主的に文学研究をする市民研究員制度も12回を数えた。

(b)運営協議会の意見

会議室の利用は増加しているが、会議室を市民の文学活動の場としていかに機能させるかが課題である。サークル同士が交流する仕組みや文学活動の成果を発表することで、それぞれの活動内容が見えるような仕組み作りが必要である。また、会議室の利用者はシニアが大部分を占めている。子育て世代や若者が利用しやすい工夫が必要である。サロン・カフェコーナー・資料閲覧室がそれぞれバラバラな印象を受ける。ブックカフェは依然として人気が高いが、文学館のカフェはその波に乗れておらず勿体ない。書架も人気のブックカフェ等を参考に、本の配置を工夫したり、ユニークな特集を企画するなど、文学館の魅力をアピールしながら居心地の良い空間とすることが必要である。



※会議室貸出件数の推移のグラフにおける2016年度会議室貸出件数は2月28日現在の見込み数である。

□ 市民の活動・交流の場としての文学館

□ 理想とするイメージ



□ 市民の活動・交流の場となるための二つの活動の現状と課題

□ 学ぶこと&実践すること

- 会議室・閲覧室の利用
- ボランティアの導入
(語り・読み聞かせ等)
- 市民研究員制度の実施
(12のテーマで実施)

□ 集うこと&育むこと

- サロンの利用方法
- お客様同士が交流するきっかけ作り
- 居心地の良い雰囲気づくり
- 新たな文学サークルの育成

提 案

ア イ デ ア

□ 活動、交流の場としての会議室・閲覧室

アンケート結果を見ると、会議室が多くの団体に利用され、利用者も満足している

- 利用団体が交流できる仕組み
- 文化活動の発表の場の提供
- 若年世代の団体の利用を増やす工夫

□ 子育て世代のニーズを考慮した空間を

子育て世代は、文学館の理念を考えた上でも重要だ。各事業は人気があるので、利用しやすい空間・仕組みづくりや事業からの誘導が必要

□ 中心市街地の居心地の良い空間の創出

はっきりした目的を持たない来館者にも、居心地の良い空間が必要

□ 魅力的な空間を創出する運営体制

喫茶(ブックカフェ)やサロンなど、文学的見地より、居心地の良い魅力的な空間づくりが優先されるスペースは民間事業者の方が経験・ノウハウを持っている。委託・指定管理も選択肢として検討しても良いのではないかと

□ 運営協議会の意見を取り入れて実施した事業

2016.7月から 実施

文学サロン「特集コーナー」の設置

2016年7月から文学サロンの書架を利用した「特集コーナー」を設置。文学館所蔵の書籍の中から、テーマに合ったものを紹介している

□ これまで実施した特集

- リオデジャネイロオリンピック開催を記念して、スポーツ、国際交流・文化交流をテーマにした特集
- 作家たちの対談集
- 作家が語る家族、家族が語る作家特集
- ことばの魅力、ことばの未来特集



効果

- これまで書架にあっても、あまり目を向けてもらえなかった書籍に目を向けてもらえるようになった
- 特集コーナーの本の貸出しが増加した

6. 文学館は次世代に何ができるのか

町田市民文学館は、開館以来子どもたちが「ことば」や「文学」の魅力に触れるための事業を重要な事業のひとつとして取り組んできた。ここでは、文学館が実施している子ども対象事業について検証・検討した。

(1) 文学館は次世代に何ができるのか

(a)現状

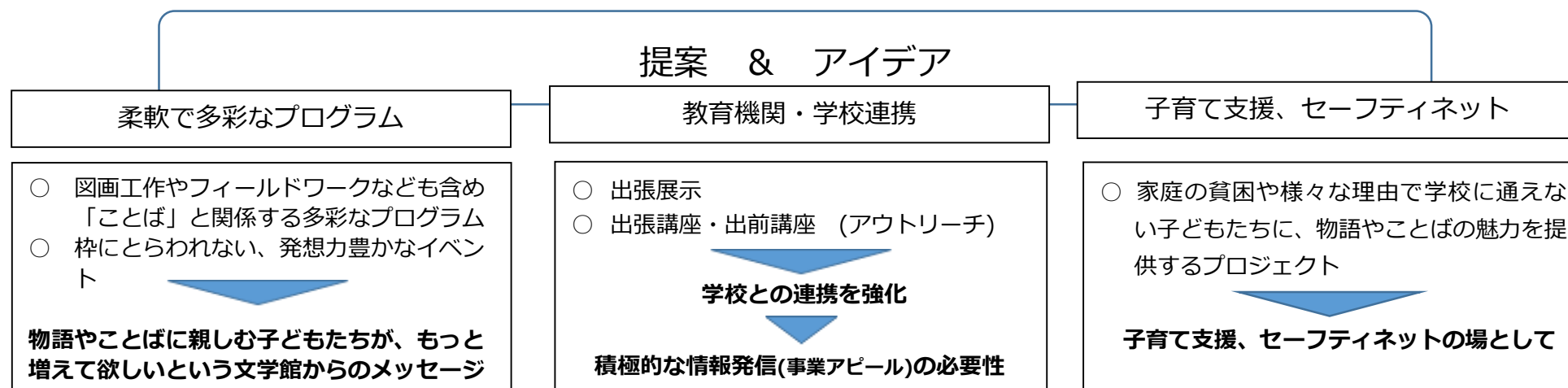
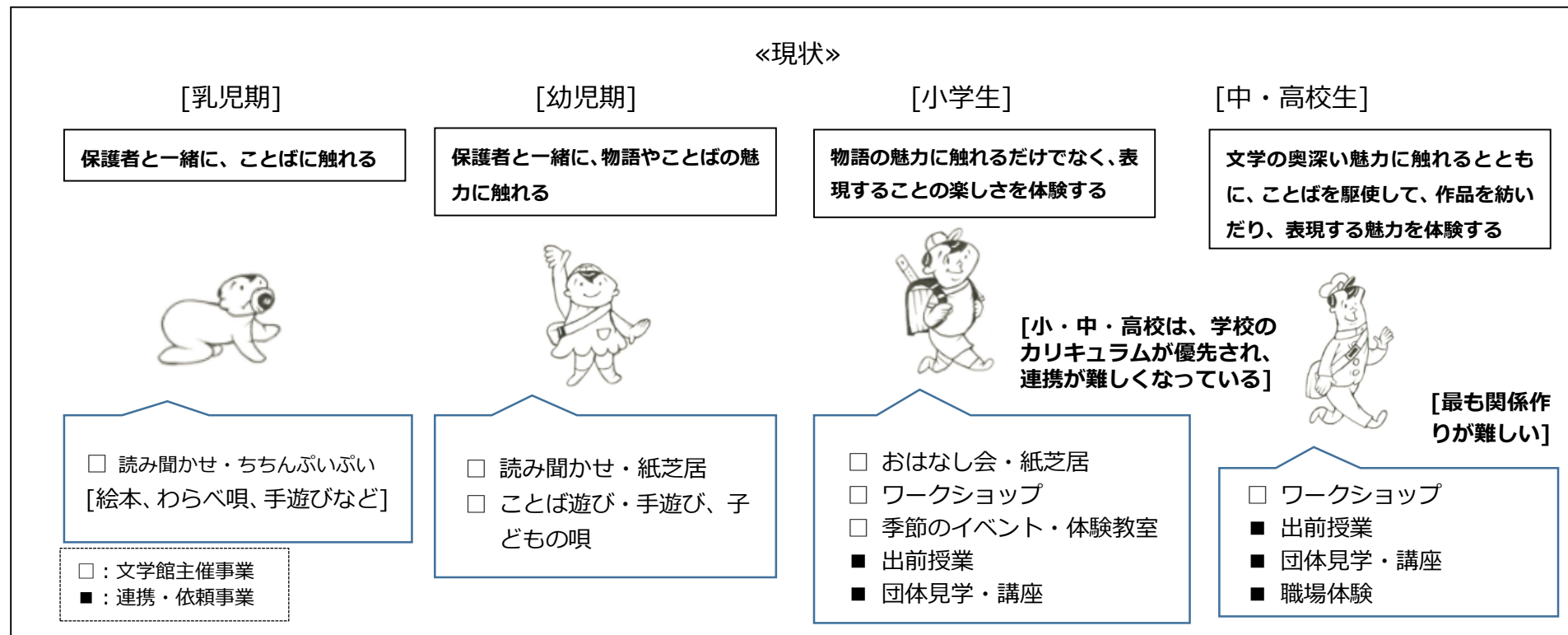
2008 年から夏季展覧会は、親子で楽しめる絵本や児童文学作品の展覧会を実施している。教育普及事業は、各年代の子どもたちが、創造力やことばの力を育むためのプログラムを開催。乳幼児向けの絵本の読み聞かせや手遊び、小学生向けの体験教室などが定着している。一方、学習指導要領の改訂により、学校単位での団体見学は減少し、職員が学校へ出向く出前授業が増加している。中・高校生世代は関係作りが難しく、継続的な事業実施はなされていない。

(b)運営協議会の意見

子どもたちに、文学館と言っても、「文学」についての具体的なイメージを持つことは難しい。「文学館に行けば、学校や図書館とは違う、面白いものや、凄いものが見られる」と感じるのが重要である。展覧会、教育普及事業では、直接「ことば」や「文学」に結びつかなくても、彼らが好きな事や興味を持つ事を積極的に取り入れて、柔軟で多彩な事業を展開して欲しい。コンテンツは揃ってきている。コンセプトの打出し方に工夫が必要である。また、夏休みの子どもたちは自由課題のテーマを探している。その中で、文学館オリジナルのもの、子どもたちが挑戦したくなるようなものがあれば、学校も PR しやすい。難しいが、学校への情報発信・連携をもっと重視する必要がある。こうした活動の積み重ねが「文学館は、物語を身近なものと感じながら成長し“ことば”を駆使して、自らの感性や考えを表現できる子どもを育てていきたい」という、メッセージにつながっていく。一方、新たな事業として、格差や貧困により居場所を無くした子どもたちの、セーフティーネット⁶・プログラムが必要となっている。

6:「安全網」を意味し、生活上の困難が生じて、安心して生活を続けられるための制度などを指す。「子どものセーフティーネット」の場合、貧困などにより困難やリスクに直面している子どもに気づき、その生活や学習を支え、将来に希望を持つことができるための制度を指す。

□ 文学館は次世代に何ができるのか



(2) 大学生および大学との連携

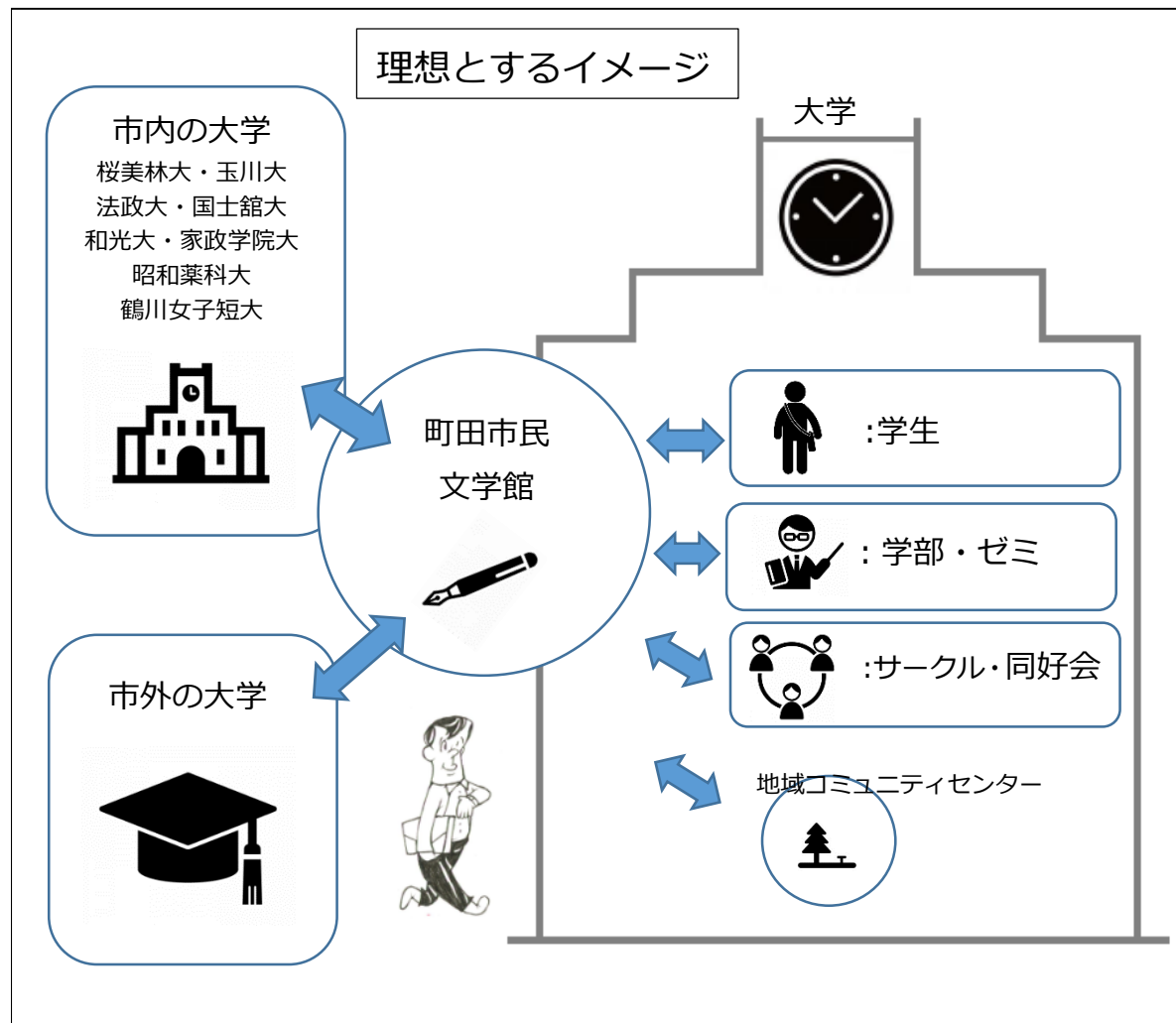
(a)現状

2010年から、大学で日本文学を専攻する学生の博物館実習受入れをスタートしている。2013年には、町田ゆかりの作家を研究対象にする学生が、文学館の資料とこれまで蓄積してきた情報を活用できるよう「アカデミックパス」制度を制定。同じく、2013年の「〈きのこ×文学〉ワンダー★ランド」展では、女子美術大学「きのこ同好会」の学生が制作した作品を1階文学サロンに展示、併せてグッズの委託販売を行った。こうした展覧会ごとの連携は、その後も継続的に行われており、2015年の日影丈吉展では、東京造形大学大学院〈Hachioji 影絵プロジェクト〉と、2016年の八木重吉展では、法政大学「詩×身×音ライブ実行委員会」と連携し、イベントを実施している。

(b)運営協議会の意見

町田市は多くの大学が集まる学園都市としての性格を有している。こうしたリソース(資源)をいかさないのは勿体ない。展覧会の対象作家やゆかりの作家を大学のゼミや授業で取り上げてもらったり、授業の一環として連携事業を実施するなど、多様な関わり方が考えられる。また、学部・学科単位や各ゼミレベルでも同様の連携事業が考えられる。近年、企業や小売店が学生に商品開発のアイデアを求める一種のコンペティションのようなものや一緒に商品開発を行う事例が、様々な業種・業態で見られる。文学館でも近隣の大学に呼び掛けて、外部から展覧会やイベントの企画を取り入れ、連携して開催するのも良いのではないか。また、大学には文芸サークルやミステリー研究会、映画研究会など、文化・芸術に関するサークルがたくさんある。彼らは、小説を書いたり、書評をしたり、映画作品を作ったり、それらの発表の場を求めている。学生による朗読会や映画の上映会、読書会等の会場として文学館の会議室を利用してもらえると良いのではないか。文学館が大学との積極的な連携を模索している、または学生が施設や文学資料を気軽に利用できるといった情報を、もっと発信していくことが必要である。

□ 大学生および大学との連携



提
案

□ 学園都市としての性格をいかした資源の活用

町田市は大学・短期大学合わせて8校がある学園都市である。各校が有する資源をいかし、連携することが求められる

□ 大学の授業・ゼミ等との連携

授業の中でゆかりの作家を取り上げたり、授業の一環として連携事業を実現したい

□ コンペティションの実施

外部から展覧会やイベントの企画を募る手法として、学生や研究室にアイデアを求める

□ サークル・研究会活動の場としての文学館

サークルや研究会の発表・活動の場として文学館の会議室を利用できる仕組みが必要

ア
イ
デ
ア

□ 運営協議会の意見を取り入れて実施した事業

2015.12.15 実施

「朗読×幻燈で愉しむ 日影丈吉
『かむなぎうた』」



- 東京造形大学大学院〈Hachioji 影絵プロジェクト〉と俳優・池田稔氏による影絵と朗読とのコラボレーションにより新たな表現の可能性を探る
- 展覧会の内容に合わせ、映像・音響・演出・朗読をプロが担当。オリジナルの影絵を作成し、学生が実演を行った。
- ゼミの成果の発表の機会と場所を提供

学生参加者数
7人

2016.11.3 実施

「ほうせい詩×身×音ライブ
－音楽と身体表現によるパフォーマンス－」



- 文学の枠を超え、音楽と身体表現によるパフォーマンスイベント
- 市内の大学(法政大学)との連携によるイベント
- イベントへの大学生の参画

学生参加者数
49人

7. 町田ゆかりの作家と資料保存センターとしての文学館

町田市民文学館では、町田と関わりを持つ作家を広く市民に知ってもらい、郷土の文学に関心を持ってもらうとともに、市域の文学資料の散逸を防ぐため、町田ゆかりの文学者の顕彰と市域の文学資料の収集・保存を行ってきた。特に資料の収集・保存については、町田との関係を主に対象作家を決めている。また結果として資料の収集・保存事業は、展示事業、教育普及事業を資料・作家情報・町田の文学的足跡の発見など、多方面から下支えする文学館の各事業の基盤となっている。ここでは、運営の基盤として普段はあまり顧みられる事のない、資料の収集・保存事業について、検証・検討した。

(1) 町田ゆかりの作家と資料保存センターとしての文学館

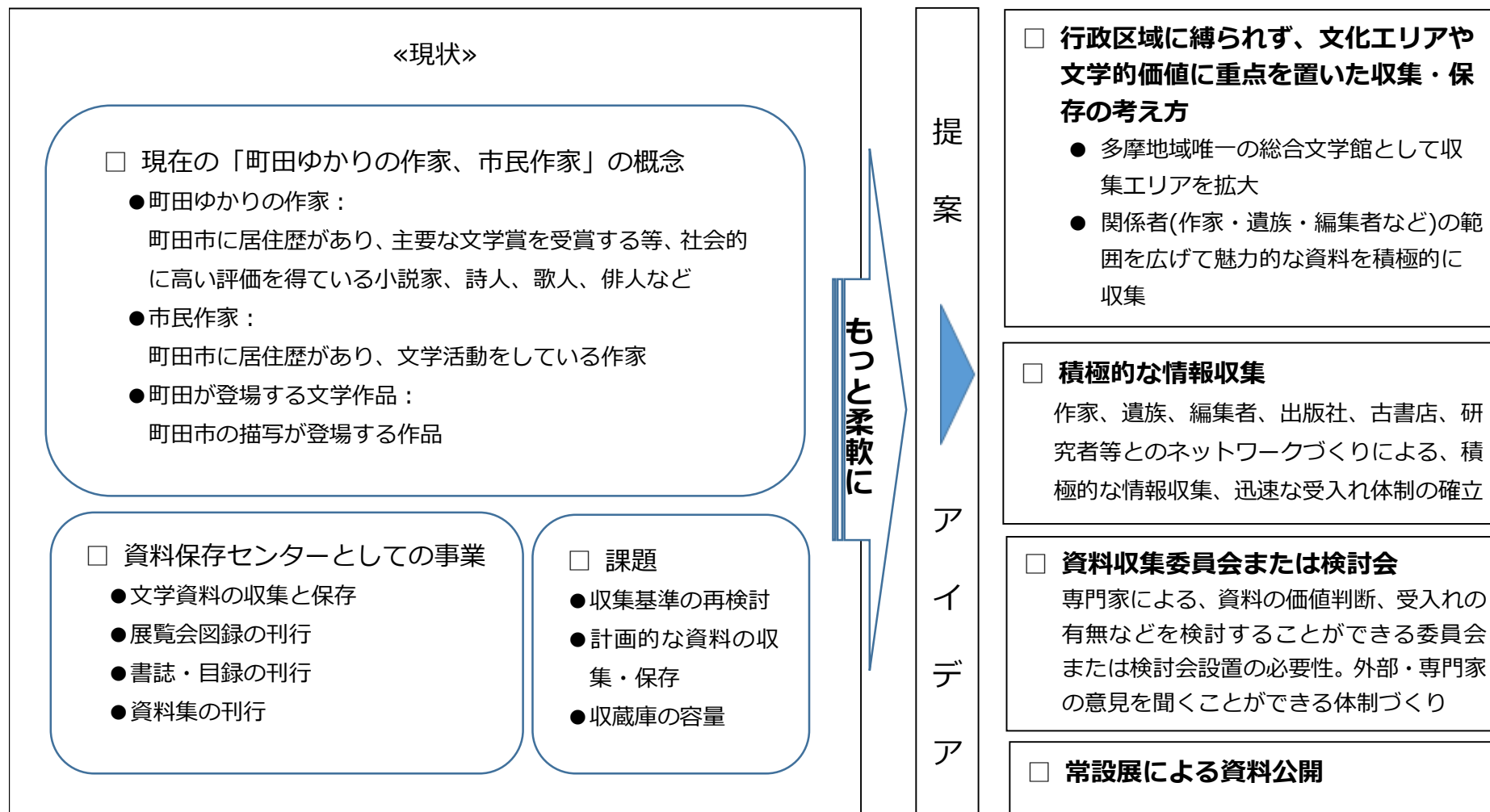
(a)現状

町田市民文学館では、町田に居住歴のある小説家、詩人、歌人、俳人等で社会的に高い評価を得ている作家を「町田ゆかりの作家」、町田に居住歴があり、文学活動をしている作家を「市民作家」、作品中に町田の描写が登場する作品を「町田が登場する文学作品」と定め、収集・保存を行ってきた。現在の「町田ゆかりの文学者」は74人である。

(b)運営協議会の意見

「町田ゆかりの作家」という基準は、文学館がどんな作家を顕彰していくのかを明らかにする上で重要である。しかし、基準に縛られることで文学資料として、貴重な資料を逃すことがないようにしてほしい。そのためには、「町田ゆかりの作家」のもうひとつ外側に「文学館と関係を持った作家たち」といった緩い基準を持つ必要がある。そして、資料の収集の際には、収集すべき資料かどうかを学芸員が判断する必要がある。一方、10年後を考えるに当たって、収蔵庫のキャパシティの問題がある。町田市民文学館は、まだ収蔵スペースに余裕があるが、収蔵庫が一杯になることも考慮した収集・保存を模索してほしい。

□ 町田ゆかりの作家と資料保存センターとしての文学館



おわりに

——「柔軟で質（クオリティ）の高い文学館」——

第3期町田市民文学館運営協議会は、2年間にわたり「今後10年の町田市民文学館のあり方について」9回の審議を行った。過去の事業の検証と、文学館の将来像の検討と、新たな事業の提案について、各委員からは毎回活発な意見が出された。

最終的に得られた共通の認識は、町田市民文学館には「柔軟で質（クオリティ）の高い文学館」を目指してほしいということであった。

それは本答申の各論に通底していることであるが、ここであらためて「柔軟」ということを具体的な態度としてまとめ直すならば、

- ① ジャンルや表現形態にこだわらない
- ② 市民・来館者のニーズを捉え、気軽に参加できる環境を整備する
- ③ 先例に捉われず、効率的で効果的な手法を積極的に導入する
- ④ 外部の人の意見を取り入れることで、新たな価値を生み出す
- ⑤ 町田ゆかりの作家にこだわらず、大きな視点で地域・文学を捉える

と言えるだろう。そして、「質（クオリティ）の高い」ことの具体的なあり方としては、

- ① 厳選（セレクト）されている
- ② 世の中のニーズに敏感でありつつ、着眼点がユニークである
- ③ 来館者にとって分かりやすく、また、親しみやすい
- ④ 細部まで気配りがなされている

といったことが挙げられる。

——次世代の「文学」のために——

そもそも、「文学」は固定的な概念ではなく、その内実が時代とともに移り変わってゆくのは当然のことである。文学館という公共施設が「文学」についてもっとも貢献できることは、過去の「文学」概念にこだわった啓蒙活動ではなく、「ことば」を中心とするさまざまな表現の中から、優れたもの・貴重なもの・新しいものに触れる機会を人々に提供し、次世代の「文学」の母胎となることであろう。「柔軟で質の高い」文学館を追求するという方向性は、そうした文学館の存在意義の確立に結びつくはずである。

文学館が、既成概念にとらわれず、明確なメッセージを具えた新しい試みにチャレンジする。それに触れた人々の心の中で、「文学」表現の新たな価値の発見が起こり、表現の機会を得て発信される。そのようにして育ってきた新しい「文学」が、文学館という場で社会に広く提示される。……こうしたサイクルを成り立たせることこそが、文学館の存在価値の核心ではないだろうか。

実際には、個別の事業の内容は、学芸員をはじめとする文学館の構成員の知識や経験によるところが大きい。町田の文学館がこれまでの10年間に試行錯誤しながら培ってきた蓄積は貴重である。そうした知識・経験を、館として継承してゆく仕組みが必要であろう。しかし、同時に、来館者の知的好奇心を掻き立てる新たな試みを、文学館として積極的に展開することを期待する。

なお、町田市民文学館運営協議会が開かれていた間、町田市による「町田市公共施設等総合管理計画」が2016年3月に策定され、公共施設の今後についての基本的な考え方が示された。さらに、現在すでに、「町田市公共施設再編計画」の策定に向けて検討委員会が組織されてもいる。本協議会が町田市教育委員会から諮問を受けた時点から、状況は大きく変化している。本協議会はこのたびこの答申を提出することで解散となるが、文学館を取り巻く状況の展開について、今後も協議会委員ひとりひとりが注視し続けるものである。

——知的な文化活動支援の一環として——

視野をさらに広げるならば、文学館は、美術館・博物館・図書館などと並んで、地域の文化芸術を支え、守り、育てる機関でなければならない。その折々のテーマによっては複数の領域をクロスさせることも望ましい。そこは、幅広い年代の人々にとって居心地のよい「楽しみ」の場、かつ、真摯な「学び」の場である。日常生活と隣り合っていて誰もが訪れることのできる、しかし、日常から距離を置くことのできる特別な場所である。そして、人々の自由な思考を保証するために必要不可欠な施設である。

一般論として、地域に文化芸術の種を蒔き、育て、次の世代に引き継がれるよう支援することは、高度な行政サービスである。だが今日、ともすればそれが財政的な理由などから後まわしにされる恐れもなしとは言えない。それでも、知的な文化活動を支援することこそが将来の社会における根底からの支えとなることは確かであり、その役割を行政が放棄してよいものではない。そうした行政サービスを維持し発展させるには、各文化機関に関わる者の、文化の総体に対する広く「柔軟」な受容力、それに、文化機関の役割についての十分な認識とそれについての発信力が重要であろう。

これからの10年、町田市民文学館には、高度な行政サービスをおこなう機関としてのたゆまぬ努力を期待する。町田市内はもとより、全国の人々を刺激し触発し続ける「文学の扉」として継続・発展してほしい。



「子ども俳句教室」



「大人のためのおはなし会」



ギャラリー・トーク

町田市民文学館 10 年後の未来予想図

(著者名、五十音順)

少し前のことだが、新世紀を迎えるにあたり、「ミレニウム」という言葉が持て囃された。来るべき新時代、世の中はどう変化するのだろう。世界はどこへ向かうのか。そんな期待が籠められた現象だったように思う。しかし、2000年から2001年への一日に限らず、昨日と今日のわずか一日で世の中に大きな変化を実感することは、むしろ稀有な事態であり、かつて日本を襲った天変地異を指摘するまでもなく、望ましくない場合が多いのではないだろうか。だからこそ、長い年月を経て達成される変化こそ、人々にとって願わしいものはない。2026年、町田のこの十年を振り返れば、商店街はゆっくりと発展を続け、若者たちから老人に至るまで、さらに多くの人々が集まるようになった。その中に私もいる。いま人々の流れは成熟した商店街を通り、整備の行き届いた町田街道を横切り、芹が谷公園へと続いている。町田市立国際版画美術館や数年前に建設された工芸館が目当てなのだ。むろん、その賑やかな老若男女の流れは、町田市民文学館ことばらんどにも立ち寄る。「ミレニウム」も「二度目の東京オリンピック」、様々の言葉に籠められた新たな期待と経験、それに街の歴史と文学を改めて振り返ることのできる贅沢な場所が、いつでもここに用意されているからだ。

1976年、町田の高校生だった私にとって《町田の文学》とは……駅前久美堂で遠藤周作を買う。市の図書館といえば、当時まだ真新しい中町の「さるびあ図書館」。

1986年、銀座まで通勤する私。建築業界の友人から赤川次郎の新居は町田、と風の噂。満員の小田急線で片岡義男や尾辻克彦（赤瀬川原平）を読む。

1996年、町田の実家を離れフリーで雑誌の仕事をする私。白洲正子の名前を聞くことが多く、「鶴川日記」や武相荘を知る（翌年白洲は町田市名誉市民、赤瀬川の二ラハウス竣工）。

2006年、町田を忘れかけた私。三浦しをん「まほろ駅前多田便利軒」が直木賞受賞。物語の舞台は町田、しかも主人公が自分と同姓という偶然に驚く。この年に町田市民文学館ことばらんど開館。

2016年、実家に生活拠点を戻した私。縁あって同館が開催した「この街の現在—ゼロ年代の町田若手作家たち—」展を手伝い、西村賢太、道尾秀介、村田沙耶香など新世代作家に魅了される。

そして、2026年某月某日。私はきっと、今後10年でさらに豊かになる《町田の文学》に触れたくて、もう覚束ないかもしれない足どりで煉瓦の建物へと向かっている。

□ 「2027年1月某日、私は町田で「文学」に参加する」

深沢 真二

今も覚えている。10年前の元日の天声人語の書き出しはこうだった。「米国の大学で、新学期になると学生にこんな問いかけをする経済学の教授がいた。「10年前には存在しなかったが、いまは身の回りにあるモノを思いつく限り言ってみて」」。

あれから10年。かつては思いもよらなかったが、今では「文学」を「体験する」装置が一般に普及している。過去の作品の文字テキストはほぼすべてデータ化され、注釈や典拠や、音声・画像・映像の情報への飛躍は自由自在。言語間の翻訳だって瞬時だ。

私は町田市民文学館でなじみの「文学スペース」（旧名称「展示室」）に入って「文学」を始めた。「文学体験」なら装置があればどこでも可能だが、ここに入るとさらに「参加する」ことができる。それは連句のような集団の実作だったり、ゼミ形式の議論の場だったり、職業的作家の創作現場に立ち会うことだったりする。

いや、こうしたことは「文学」だけの話ではない。ほかにも「思想」「哲学」「史学」などの装置が普及して、誰もがすぐれた知性に容易に触れ、参加できるようになった。おかげで人々の相互理解は進み、ついに世界から紛争がなくなろうとしている。

こんな状況を10年前には想像もしなかった。

□ 「2026年5月1日の夕方、仕事を終えた私は歩いて文学館に向かう。」
宮本 隆介

2026年5月1日の夕方、私は近くのシェアオフィスでの仕事を終え、文学館に向かう。ここでは、文学にかぎらず、趣味や仕事に役立つ様々な講座が開かれ、集客の主軸になっている。講師は、町田で起業した人、地元出身で世界で活躍する人が中心。受講料はまちづくりへの貢献度ポイントによる仮想通貨で払われる。

今日の講義は、「町田の食材を使った料理教室」。市内丘陵地で有機農業に取り組む農家と、都心からも人を集めるレストランのシェフが開く人気講座だ。食の安全性は世界的な課題となり、「地産地消」は地域ブランディングの主軸になっている。町田は地域特性をうまく生かし、「日本のポートランド」などと呼ばれるようになった。歩行者優先で緑豊かになった新しい文学館通りには、ブックストアやブルーパブ、レストランやクラフトショップが建ち並び、オープンテラスの客席もある。ここに来れば、なにか面白いことがありそうだ、ビジネスチャンスを掴めそうなどと、一日中、多くの人を訪れる。その拠点が文学館。スタッフらは、文学がもっている「いまここにはない、なにかよいこと」を構想する力が、まちづくりに生かせることを「発見」した。

講義後は、1階のカフェレストランで仲間たちと、地ビールやワインとともにできたての料理を食べながら、次の仕事に向けた意見交換をしようと思う。

□ 町田市民文学館 10 年後の未来予想図

武藤 充

68 才。さすがに時間はタツプリとある。当時通りにあったお店は随分となくなってしまった気がするけれど、相変わらず個人のお店がほどよくある。歩道は整備され、あの頃より歩きやすくなった。車で行くにしても近くにコインパーキングはあるし、なかなか便利な処なんだ。それだけに、文学館に行って何をするかということより、帰りにどうしようかということを考えてしまう。「ことばらんど」に行ったあとのことを妄想。帰りには蕎麦を食べ、ショットバーに寄って。そうだ、だからやっぱり歩いて行かなけりゃダメなんだ。あれあれ、ではさて、そもそも文学館に何をしに行こうとしていたのだっけ。まあ、いいや。どうせそのうち思い出すだろう。時間はタツプリあるんだ。とりあえず散歩と決めこんで行動に移そう。それで十分。それ以上のものがあったらラッキーってことなんだよ。とにかく文学館に行ってみよう。

□ 「2027 年春うららかな土曜日の朝」

保井 美樹

私がお気に入りの町田市民文学館「ことばらんど」のカフェは、週末になると前の広場でオープンカフェを開催する。それに合わせて、地元の人たちが古本市、古い美術品などが手に入る骨董市、地元でとれた野菜を買えるマルシェを開いていて、土曜日の朝は、この辺ではちょっと知られるイベントになっている。私もここ数年、土曜日の朝は、このマルシェで買ったパンとコーヒーで朝ごはんをいただく生活を続けている。

ここの何が楽しいって、いろんな人と出会えること。今朝、カフェで隣に座った咲歩さんは、構成作家を目指しているそう。だ。「ことばらんど」には、作家志望の人たちが集うサロンがあって、文学界の「金の卵」となる人材が多く集まる。このサロンに参加するために、子ども達が学ぶ「ことば教室」も人気で、最近は、そのために町田市に引っ越してくる人もいるそう。

このように、共に学び、集い、自ら暮らしを創造する人たちによって育てられる「ことばらんど」。その魅力にすっかり感化され、私も、2 年前から自分で描いたデッサンにショートストーリーを添える作品集をつくるようになった。もともと、子ども達が大きくなったら、デッサンを本格的に再開したいと思っていた。「ことばらんど」がその機会を与えてくれた。

□ 「2026年某月某日、私は文学館に何をしに行くか？」

吉田 孔一

2020年東京オリンピックも熱気の中、無事に終了した。その後、ノーベル文学賞を日本人が受賞したことや、若手人気作家の活躍が話題となり、全国的に文学への興味・関心が高まっていた。小学生の希望の職業アンケートでは、男女とも「作家」が上位となった。

2026年、市民文学館通りから芹が谷公園への「町田文化芸術エリア」として、市民文学館・国際版画美術館・国際工芸美術館等は発展を続け、市民の間に定着が進んでいた。

町田市内の各学校では、2028年から完全実施となる、次期「新学習指導要領」の先行実施が始まっていた。その改訂の柱の中に、「美しい日本のこころ・文化芸術教育の重視」「文学教材の充実で思考力・判断力・表現力の向上」が掲げられ、文学館との連携が進んだ。毎年、文学館での体験学習が実施されている。

某月某日、子供たちを引率して文学館にやって来た。今年もICTを活用した「クロスジャンル」の展示・体験コーナーは子供たちに大変好評であった。「また、お友達やお家の人と来たいな。」子供たちの笑顔が輝いていた。

□ 「ことばらんど」とオレのつきあい 渡邊 正彦

今日は午前中に、以前から気になっていた町田駅周辺を舞台としたあの映画の資料を、「ことばらんど」に探しに行こう。DVDも借りられるし、たしか映画ゆかりの場所の地図もあったっけ。午後はそれを使って舞台探訪と洒落込もうか。

初めて訪れたのは、まだ高校生だった10年前で、お目当ての漫画に関する資料を展示した企画展のときだった。「文学館」という名称から図書館みたいに堅苦しい場所だと思っていたが、このあたり周辺に縁のあるアニメや漫画などの情報や資料もたくさんあることを知ったのは、そのときだった。お目当ての資料は、その企画展の一部だったけれど、驚いたのは、町田周辺に縁のある知らなかったサブカルチャーが、たくさんあることだった。あの漫画家は、ストーリーを考えると、あの映画のことを意識すると言っていたので、興味を惹かれてその映画を見た。そんなことをしているうちに、何か町田周辺にしかない雰囲気とでもいうべきものが、ひしひしと感じられるようになってきた。仲見世ってレトロでいいなと、つくづく思うようになった。

そうか、オレが育ってきたのは、こういう街の雰囲気の中でだったんだと感じるようになったのは、ここ2、3年だろうか。それまで自分が生まれ育った街に興味を持ったことはなかったけれど、そんなことを感じさせるきっかけとなった「ことばらんど」は、町田が私の故郷なんだということを改めて認識させてくれた場所、と言っても言い過ぎではないと感じる今日この頃です。

資料編

(1) 諮問文

15町教生図第124号
2015年7月30日

町田市民文学館運営協議会
会長 深沢 眞二 様

町田市教育委員会
教育長 坂本 修



今後10年の「町田市民文学館のあり方」について（諮問）

このことについて、町田市民文学館条例第20条及び町田市教育委員会事務局の組織等に関する規則第26条（別表第3）の規定に基づき、町田市民文学館の運営に関し下記の事項を諮問しますので、ご協議くださいますようお願いいたします。

記

1 諮問事項

今後10年の「町田市民文学館のあり方」について

2 諮問理由

町田市民文学館は「目指すべき文学館像」として、①「町田の文学」に関する総合的な資料保存センター、②「文学はおもしろい」というメッセージの発信源、③市民の文学活動・交流・楽しみの拠点、④市民主体の学習・研究活動の場、⑤町田の都市イメージを高める文化装置の5つを掲げ、2006年10月に開館して9年目を迎えました。

この間、町田市民文学館では、町田ゆかりの文学資料の収集、整理、保存に努めるとともに、様々な展覧会や講座、講演会を開催することなどで、来館者数は着実に増加してきました。しかしながら、町田市民文学館の存在が広く浸透しているとは言いがたい状況にあります。

そこで、これまでの事業や活動を振り返り、今後10年の「町田市民文学館のあり方」について諮問するものです。

3 協議期限

2017年6月30日まで

(2) 第3期町田市民文学館運営協議会 委員名簿

選出区分	氏名	所属・経歴
学識経験者(研究者)	(会長) 深沢 眞二	和光大学表現学部総合文化学科教授
学識経験者(研究者)	(副会長) 渡邊 正彦	玉川大学リベラルアーツ学部リベラルアーツ学科教授
学識経験者(研究者)	保井 美樹	法政大学現代福祉学部福祉コミュニティ学科教授
学識経験者(作家)	翔田 寛	
学識経験者(編集者)	多田 洋一	文芸創作誌「Witchenkare」編集長
学識経験者(編集者)	宮本 隆介	町田経済新聞編集長
学校教育関係者	吉田 孔一	町田市立南第三小学校校長
市民	武藤 充	

(敬称略)

(3) 第3期町田市民文学館運営協議会 審議経過

○第1回運営協議会 2015年7月30日(木)

- ・町田市民文学館のこれまでの経過
- ・文学館などの文化施設に、いま、求められていること

○第2回運営協議会 2015年10月1日(木)

- ・文学の魅力をどのように伝えるのか

○第3回運営協議会 2015年12月24日(木)

- ・文学館の各事業の情報・魅力をどのように発信するのか

○第4回運営協議会 2016年2月18日(木)

- ・街づくりと文学館

○第5回運営協議会 2016年5月19日(木)

- ・町田市民文学館の運営手法について
- ・市民の活動・交流の場としての文学館

○第6回運営協議会 2016年7月28日(木)

- ・文学館は次世代に何ができるのか

○第7回運営協議会 2016年10月27日(木)

- ・町田ゆかりの作家と資料保存センターとしての文学館

○第8回運営協議会 2016年12月22日(木)

- ・答申書(案)について

○第9回運営協議会 2017年1月26日(木)

- ・答申書(最終案)について

今後 10 年の町田市民文学館のあり方について

— 答 申 —

2017 年 3 月発行

発 行 町田市教育委員会生涯学習部図書館
町田市民文学館
〒194-0013 町田市原町田 4-16-17
電話 042-739-3420

刊行物番号 16-103

印 刷 庁内印刷